

氏が自ら日本植物を手を下だして採集するには、極めてやかましい制約があつたのである。僅かに江戸への往復の途中箱根 (Fakone) などで道中の警護むしろ監視を押し切つて草木に手を触れ、僅かに渴を慰いたらしい以外には、出島の埋立地から外へ出ることもできず、通訳や弟子を主とした少数の日本人から贈られる断枝片葉で、未知の日本植物を処理せざるを得なかつたのであろう。そうした場合、開花期の枝、結実期の枝或は營養枝等お互いが甚だしく形態を異にする時には、殊にそれが異なる人を経て入手された時には両者を共に記述しながら、同一種とは気づかずにすんでしまうことは起りえたことと思われる。現に日本植物誌中でも本種の外にもコクサギを和名も *Kokusagi* としながら不用品 29 番に *Evonymoides* (p. 354) として、果実のついた枝を書き、一方雄花序のある若い枝で、*Oriza* (p. 3 及び 61) として新属を立てしかもコクサギの和名もつけていないのは同様な事例である。同氏が心行くままに長崎の山野を歩けたらこうしたことは起らなかつたに違いあるまい。

○木曾谷南部にエゾユズリハ産す (奥原弘人) Hiroto OKUHARA: *Daphniphyllum macropodum* var. *humile* occurs extraordinarily in the southern part of Kiso, Nagano Pref.

木曾谷と言へば暖地性植物が東海道地区から北上分布を示している点を思い浮べるのであるが、其の木曾谷南部の阿寺 (アテラ) 国有林 (長野県西筑摩郡大桑村) 内に於てエゾユズリハの群落を 2 地点に見出した。此の種類は北海道、本州に分布し、本州にては主に日本海沿岸地方に知られている。信州でも今迄北部にある事は分つており、横内斎氏によれば多分北安曇郡北城 (ホクジョウ) 村 (白馬山麓) 以南には知られていなかったらうと云う。故にエゾユズリハの分布の上 (殊に南北の) からは、飛地的に阿寺国有林内に産することになる。

阿寺国有林は木曾川の支流阿寺川の全流域にわたる溪谷を含み、其の殆ど全体が石英斑岩より成る。阿寺川は長野、岐阜両県境に源を発し、初め東に流れ後に南東に変向して中央隼野尻駅西方に於いて木曾川に合する。エゾユズリハの第 1 の産地は阿寺川を溯ること約 12 km の付知又 (フチマタ) 附近 (1951 年 10 月 16 日発見) であり、第 2 の産地は阿寺川に注ぐ北沢を約 1.5 km 溯つた上大沢の一部 (1953 年 11 月 8 日発見) である。此の辺の植生概況は、(1) 阿寺川下流 (海拔約 500 m) の山地はヒノキにサワラ、コウヤマキ、アスナロ、アカマツ、モミ、ツガ等を混じた針葉樹林で、ホオノキ、クリ、コナラ、ウラジロガシ、ミズメ、シロモジ、マルバノキ、アサマツゲ、ユズリハ、シラキ、コウヤミズギ、ケンボナシ、イイギリ、ヤブムラサキ等の潤葉樹や、ヨウラタラン、マツラン、ツルシノブ等の暖地性草本も見られる。(2) 付知又附近は海拔約 1200 m、上大沢は約 1100 m で、共にヒノキ林である。林中にはクリ、ミズナラ、ミズメ、ヤマハンノキ、クマシデ、サワグルミ、ウワミズザクラ、ウリハダカエデ、コシ

アブラ、ミズキ、リュウブ、それにアスナロ、サワラ、ヒメコマツ等も少量混じている。樹下にはニワトコ、オオカメノキ、ムラサキシキブ、タラノキ、ツルツゲ、イヌツゲ、アカミノイヌツゲ、ツルシキミ、キイチゴ、ミヤマモミジイチゴ、ハスノハイチゴ、マルバノキ、オオヤマレンゲ等の灌木や、シシガシラ、シノブカグマ、ミヤマイチシダ、オンシダ、ヤマソテツ、バイカオウレン、ツルアリドウシ等の草本が見られる。エゾユズリハは以上の如き植生の中に 5~15 m² の範囲で6ヶ所の群落をかぞえ（付知又にて）、100 m² 以上に亘つて或は密に或は疎に群生（上大沢にて）している。樹高は1 m 内外であつた。

林弥栄氏はエゾユズリハの西南限は恐らく山口県佐波郡の滑山であろうと言われ、同山には裏日本側を主産地とする種々の種類が中国山脈に沿うて西下して来ているとの事である。阿寺国有林内の2産地は滑山よりも北に位置してはいるが、信州として見れば北部地区と木曾南部とでは現在フローラの溝がある訳である。即ち北信地区は明かに裏日本系のフローラに入るが、木曾谷南部は表日本系フローラに属し而も暖地性の種類を少なからず有する。周防滑山は裏日本系の種類と暖地性の種類とが混在する点で阿寺国有林と異ると思ふ。木曾谷の南部は年降水量 2400~2650 mm あり、大桑村野尻の辺は暖い所であるが、1946年頃に2日程で約1 m の積雪を見たことを記憶する。付知又附近の積雪量は12月下旬に約30 cm、1月下旬に約1 m、2月に約1.5 m、3月中旬に約1 m、下旬に約60 cm という報告(1949~1953)を得たが、2月~3月上旬が最多量であり1.5 m と云う可成りな量である。之に対し木曾川本流沿いでは日陰で10 cm 位(1~2月頃)であるから冬の降水量に大差があることが分る。換言すれば阿寺国有林内のエゾユズリハ産地は局部的に裏日本的気候を呈すると言ひ得るであろう。故に其所のエゾユズリハは矢張り其の本来の生育環境(深雪)らしい場所に生育を続けていると云う事は言つて良いと思ふ。尙木曾谷に於けるユズリハの北限は木曾川沿いの大桑村、殿であり、エゾユズリハの産地を距ること東へ約10 km、緯度の上では南に僅々数百米距るのみである。然し上記の如く冬の降水量は全く違い、表日本型である。

本文を記すに当り、資源科学研究所の水島正美氏の御援助を戴いた。ここに厚く感謝の意を表します。
(長野県西筑摩郡山口村、村立山口中学校)

正 誤 Errata (Vol. 29 No. 5, p. 149, line 3)

正 (read)

Takeuchii

誤 (for)

Takauchii